

小林一茶と金笠の比較検討への試み

- 諧謔と弱者性を中心に -

하영미*

nihon418@hanmail.net

〈目次〉

- | | |
|---------------|---------|
| 1. はじめに | 3. 弱者の詩 |
| 2. 諧謔 | 4. おわりに |
| 2.1. 諷刺 | |
| 2.2. 飛躍・擬人法 | |
| 2.3. 同音・同字の反復 | |

Key Words : 小林一茶(Kobayashi Issa)、金笠(Kim Satgat)、発句(hokku)、
諧謔(humor)、弱者(the weak)

1. はじめに

本考では小林一茶(1763~1827、以下‘一茶’とする)と金笠(キムサッカ、1807~1863)の作風における比較検討を中心に論じる。特に両者の作品の中にどのような共通点があり、どのような相違点があるのか、このような疑問点を、分析を通じて検討して見たい。

大概、詩人、とりわけ昔の詩人には‘旅’という言葉がよく当てはまると考えられるが、両者における‘旅’に関しては次回に譲ることにする。紙面の都合もあり、ここでは両者における表現上での比較検討だけにまと

* 成均館大学校 東アジア学院 博士課程

め、これまでなかった両者の比較研究への先駆けになれば幸である。なお、両者の作品に表れたユーモア・弱者性などの比較検討を通じ、同時代の東アジアの詩歌における一つの流れと言えるものはないか、その点も明らかにしたい。

まず、簡単ながら韓国での金笠研究の状況を見てみよう。定まった全集が最初からなかったため、発見できた時点で詩集をまとめた痕跡が多いのが現実であり、全国各地(彼の放浪先)で金笠の作品を探している研究者もいるといわれる。そんな中、研究¹⁾も早くから進められており、『東人』(年代未詳、金笠詩収録の筆写本)を手掛かりとして詩選集が出始めるようになった。なお、李応洙が編纂した『金笠詩集』(1939年初版：1945年、46年、47年と版を重ねて出版、大丘・啓明出版社)は金笠詩集の基本テキストとして積極的な支持を受けている。さらに2000年3月11日には今までの金笠詩を総網羅した『正本金笠諷刺詩全集』(実践文学社)を編んでいる。さらに李応洙は金笠のことを記載した同時代の文献五種についても紹介している²⁾。なお、日本での金笠研究論文は、李応洙の『金笠詩集』をテキストにして書かれた今村与志夫の「諷刺と抒情—金笠の詩の鑑賞と批評」(『歴史と文学の諸相』1976年、勁草書房)が挙げられる現状である。なお、今村は金笠について「金笠の詩には、ユーモアにとむ作品が多い。観察がこまやかで、自然の事物にひそむ可笑しさをひき出すことが上手なのである」³⁾と評している。

さて、今日の俳句国際化が拡大している時点において、より一層、一茶

1) *単行本、①金ヨンソップ著『金笠放浪旅程』(博英社1974年刊)②李文烈著、『詩人』(未来文学 1991年)③金ヨン Chol 著、『放浪詩人金笠』(明文堂 1992年)④ナドンガ ン 著、『金笠神学』(図書出版コヨアチム 2003年)⑤鄭デグ著、『金笠研究』(文学 アカデミ 2003年)。

*論文、①「金笠の生涯と文学」(鄭デグ)②「金笠詩想の現代的照明」(朴チョロ)③「蘭阜金笠の生涯と文学」(嚴フンヨン)、以上の論文は《トンガン文学》(2001年3月25日 創刊号)という文芸誌に掲載されたものである。

2) 『大東奇聞』(1931年初版、朝鮮時代の逸話集で、金笠の名前について言及)、『大東詩選』(年代未詳、「詠笠」詩を収録)、『海東詩選』(1917年増補版、「入金剛」詩を収録)、『緑比集』(年代未詳、「金笠笠伝」の文章を収録)、『金笠笠の事を記す』(生前の金笠の横顔を詳しく伝えている書)。

3) 今村与志夫(1976)『歴史と文学の諸相』勁草書房 pp.211-212

に対する関心も高まっている。したがって一茶と最も類似した傾向を持つ人物として、韓国(朝鮮)の金笠に注目し、両者の特徴を比較検討することもまた当然なことであると考ええる。よって、本考では、同一の儒教漢字文化圏内に生き、最も近い距離にある両国の韻文文学の側面を一茶の発句と金笠の詩(漢詩)を用い、その表現における諧謔・弱者性に纏め比較検討する⁴⁾。それに、小林一茶と金笠に関しての先行研究のない現在において意味のある試みであると考えられる。

2. 諧謔

2.1 諷刺

正岡子規の評する一茶句の特徴の一つに「諷刺」が挙げられる⁵⁾。一茶の諷刺は彼の平凡でない不幸な家庭環境から始まった潜在的な被害意識と自己を肯定的に認めてくれない周辺の人々への怨望或は自虐・自嘲の雰囲気内在しており、時には支配階層に対する不満を諷刺により吐露したりもした。また、その時その時の状況により国家や支配階層などを讃美したりもした。だが、常に弱者や庶民の立場で見つめる彼の精神的な姿勢からすれば加害者よりは被害者の立場での状況把握がより違和感のない方法だったのであろう。なお、家庭不和を表面的な理由として15歳(数え年)で家を出て、江戸奉公に出向くが、これは当時の社会的状況が、田舎者への配慮、受容が困難で、一茶の出郷直後の安永6年(1777)5月には農民の出稼ぎ

4) 本文の一茶の発句は『一茶全集 第一巻 発句』(信濃毎日新聞社、1977年)による。
本文の金笠の詩(漢詩)は李應洙編『正本金笠諷刺詩全集』(実践文学社、2000年)による。

5) 一茶の俳句を評す

天明以後俳諧壇上に立ち、特色を現したる者を、奥の乙二、信の一茶とす。

一茶最も奇警を以て著る。俳句の實質に於ける一茶の特色は、主として滑稽、諷刺、慈愛の三点にあり。中にも滑稽は一茶の獨壇に属し、しかもその輕妙なること、俳句界數百年間、僅に似たる者をだに見ず。(下略)

正岡子規(1931)『正岡子規全集 第一巻』改造社 p.400

禁止の令が出ている。結局、一茶のように何の準備も無しで江戸に着いた人々は荒奉公や都市の浮浪者になって日々を凌いでいたと想像できる。また柏原は享保2年(1717)以降幕府直轄の天領となるが、当時の社会的事情を栗山理一の説⁶⁾から引けば次のようである。

柏原は享保二年(1717)以降幕府直轄の天領となり、中野代官所の支配化に置かれたが、幕府の搾取もきびしかったことは、一茶出郷の年の正月に高井水内両郡に重課公納延期や免租を要求する農民の暴動が起こっていることでもわかる。一茶の江戸奉公も、母子不和によるためではあったが、一つには生活の困窮からの口減らしの手段であったと考えられる。当時江戸へ流入した農村からの出稼ぎ人口はおびただしく、一茶のみが例外ではない。農民一撥は享保以来頻出しているが、松平定信の治政の時代は、天変地異がつづき、物価騰貴や幕府財政の逼迫に苦しめられ、とくに農村の疲弊は全国的な規模における農民一撥をうながし、強訴、越訴、国訴などのほか、ほとんど毎年のように打毀としと呼ばれる暴動事件が勃発している。農民の流出に対して帰村奨励の触れや物価引下げ、備荒貯穀令などがだされたのは寛政2年(1790)のことである。

上記の如く、一茶は江戸に出されてからどれほど苦勞していたかがうかがわれ、彼自身、『九番日記』(文政6)正月の条に、「巢なし鳥」と自称しながら放浪の苦心をよく吐露している。このような観点からすれば初めて足を踏み入れた江戸という大都市で「椋鳥」と揶揄されつつ差別を受けることとなり、またあちこちを転々としながら一日一日を凌ぐしかなかった一茶の立場からすれば持てる者(富者)と持たざる者(貧者)、学びし者(有識者)と学ばざる者(無識者)など、其々の立場の差から生ずるギャップは常に持っていたはずである。それゆえ、彼の諷刺句にはその意識が巧く表現されているのである。例えば、

夕桜家ある人はとくかへる	『享和句帖』	(享和3年)
梅ばちの大提灯やかすみから	『七番日記』	(文政1年)
椋鳥と人に呼るゝ寒さ哉	『八番日記』	(文政2年)

6) 清水孝之、栗山理一編(1976)『蕪村 一茶』角川書店 p.234

迹供は霞引きけり加賀の守	『八番日記』	(文政3年)
ずぶ濡れの大名を見る炬燵哉	『八番日記』	(文政3年)
人誹る會が立つなり冬籠	『文政句帖』	(文政6年)

などが挙げられる。「椋鳥と」の句は当時の時代状況とともに江戸人にそうよばれた田舎者の持つ疎外感あるいは孤独感が伝わり冷たく白眼視する社会への諷刺を訴えている。なお、「夕桜」の句からは家ある人に対して帰る家のない自己と自己同様の貧しい生活に置かれている庶民への同情や貧富の差の大きい社会全般を諷刺している。「梅ばちの」「ずぶ濡れの」「迹供は」では支配階層に対する不満を皮肉な視線で見つめている。なお、当時の厳格な身分制度下での低い位置を占める農民(農民の子)は、「ずぶ濡れの大名」を密かにみながら快哉を呼んでいる姿にユーモアが溢れている。この他にも支配階層の武士を風刺した句を挙げればつぎの通りである。

武士に蠅を追はする御馬哉	『七番日記』	(文化13年)
関守の灸点はやる梅の花	『おらが春』	(文政2年)
夕立と樹下石上の小役人	『八番日記』	(文政2年)
春雨や侍二人犬の供	『八番日記』	(文政3年)

など、表面的には武士への尊敬もあるように見え、その裏からは支配階級の武士達を辛辣に諷刺している。

金笠の場合も、諷刺詩は詩の全般におよぶほど多い。とくに支配階級になれなかった彼の身分的葛藤の存在により当時の支配階層のヤンバンを皮肉った詩がもっとも多かった。この点においては一茶と類似する部分が多いといえよう。ところが、金笠の場合は詠まれる単語自体に悪口があったり精製されない鬱憤を巧みに同音異語などの導入をもって作品化している。さらにそのように表現しようとする意図の中にすでに諷刺性が詠み込まれているのも多数ある。例えば、

弄詩

六月炎天鳥坐睡(①)
九月涼風蠅盡死(②)
月出東嶺蚊簷至(③)
日落西山鳥向巢(④)⁷⁾

上記の①は趙坐首(チョザス)、②は承進士(スンジンサ)、③は文僉知(ムンチョムジ)、④は吳郷首(オヒャンス)の字の同音を以って、それらの悪徳の人物(支配者)を揶揄する意図をもって、巧妙に各各、「鳥」「蠅」「蚊」「鳥」等の鳥虫の字音を当てている⁸⁾。更に、四人の両班(支配階層)の宴会での贅沢な様子を告発・諷刺している。このような作詩の形も伝統漢詩の世界では見受けられない破格的な詠み振りである。これまた、形式的で封建的なヤンバン社会に対しての庶民の代表として、彼の反感と揶揄の表現と言える。

嘲年長冠子

方冠長竹兩班兒
新買鄒書大讀之
白昼猴孫初出袋
黄昏蛙子乳亂鳴池⁹⁾

-
- 7) 六月の炎天に鳥は坐って睡り
九月の涼風に蠅は尽く死す
月は東嶺から出て、蚊は簷に至り
日は西山に落ちて、鳥は巢に向う。(訳文は筆者によるものである。)
- 8) 坐首は朝鮮時代、地方(州・府・郡・縣)においた郷庁の首領。進士は朝鮮時代、試験名の小科・進士科に通った人のこと。僉知は、同じく朝鮮時代に、人の性の下に付けて「年寄り」を下げてさり気無く呼ぶ名称である。郷首は朝鮮時代の各村落における首領の総称。
『国語大事典』(韓国：コンソン出版社、1991年)より抜粋、まとめたものである。
- 9) 方冠をもらい、長竹を持った両班の子息よ
買ったばかりの『孟子』を大声で読んでいる
真昼に猴孫が初めて袋から出たのか?
黄昏に蛙子が乱りに池で鳴いているのか? (同上)

上記は、ある両班家のソンビが新しく購入した『孟子』を自慢そうに大声で読んでいる姿があまりにも滑稽でその光景を見て詠んだ諷刺詩である。

求鷹判題

得於青山

失於青山

問於青山

青山不答

青山即刻捉来¹⁰⁾

上記は、ある村を過ぎ去ろうとしたところ、小役人達が大騒ぎをしている。事情を聞くと、その地方の守が青山で鷹を捕らえたが、また逃げられてしまいその鷹を捕まえて来るように大声で怒鳴っているとのことである。その経緯を聞いて金笠が揶揄して詠んだ弄詩である。

一茶・金笠、両者とも諷刺詩の大家であり、時代的・社会的状況や個人的状況等が巧く溶け合い絶妙な諷刺詩が出来上がったとも言える。なお、個人的事情は異なるが、社会の不合理性に対抗する意識は非常に類似している。つまり、一茶の諷刺は表の肯定的な表現が裏面の諷刺性をより浮き彫りしている。反面、金笠の場合即興的で飾り気のない直説的な諷刺性は漢字音とハングル音の同音や反復の修法により明確に表れている。

2.2. 飛躍・擬人法

諷刺につづいて明るい諧謔として飛躍と擬人法による表現を検討してみる。特に、一茶は飛躍や擬人法による滑稽美の優れた句が多い。その中からまず飛躍による滑稽句について論ずる。例えば、

なの花のとっばづれ也ふじの山 『七番日記』 (文化9年)

10) 青山で得たが、
青山で無くしたので
青山に問い、答えがなければ
あの乱暴な青山を捕まえて来よう。(同上)

なの花の中を浅間のけぶり哉 『七番日記』 (文化13年)
蟻の道雲の峰よりつゞきけり 『八番日記』 (文政2年)

一目、一幅の絵の中を覗いているような感じがしながらも遠近による絶妙な対置形態が不均衡をなしている中、実際に清新な笑いとして読み手を刺激する。この他にも一茶句からこの類の諧謔的な句はいくらでも拾い出せる。例えば、

不二に尻を並べてなく蛙 『七番日記』 (文化9年)
有明や不二へ不二へと蚤のとぶ 『七番日記』 (文化10年)
大雪や膳の際から越後山 『七番日記』 (文化10年)
蝸牛とも不二へ不二へ上る也 『文政句帖』 (文政6年)

等の句が挙げられる。

金笠の詩からは飛躍法による作品は多くは見つからないが、一茶の一句の中に「大・小」を詠みこんだの¹¹⁾と同じように相互に対比されるものを取り上げて諷刺したり「大」の方をより強調する修法を使用した詩は見受けられる。例えば、

① 菘

外貌將軍衛
中心太子燕
汝本地気物
何事体天团¹²⁾

-
- 11) 小薺大薺も九月哉 『文化句帖』 (文化2年)
涼しさは雲の大峰小みね哉 『七番日記』 (文化11年)
大時雨小しぐれ寝るもむづかしや 『七番日記』 (文化11年)
引うける大盃に小てふ哉 『八番日記』 (文政3年)
- 12) 外貌は衛將軍
中心は燕太子。
おまえは元々地の気から生じた物なのに
天のように丸いとは何事か？ (同上)

② 虱

飢而吮血飽而擠
三百昆蟲最下才
遠客懷中愁午日
窮人腹上聽晨雷

形雖似麥難為麴
字不成風未落梅
問爾能侵仙骨否
姑搔首坐天台¹³⁾

が挙げられるが、①の漢詩は外面に現れる衛青將軍の猛々しいイメージと穏やかな性格の持ち主である燕太子(中国の戦国時代、燕国のファンヒの息子)のイメージの対比が面白い。それにそれらを「虱」という素材から表現したのがまたユーモアがあって面白い。特定の表面的なユーモアは感じ取れないが、まるで人間の人柄の品評でもするように詠み込んだところにユーモアがあると言える。また、②の漢詩においては一茶の句からもうかがえるような飛躍の感が存在する。一茶の句のように短くはないが、内容的に実に面白くて天台山の麻姑老婆が虱のため頭搔くとの部分は非常に奇抜な発想であると言わねばならない。

一方、擬人法においては、一茶の句が漸然目立つ。

松そびへ魚をどりて春惜む哉 『两国紀行』 (寛政7年)

13) 飢えては血を吮い、飽いては擠く
三百ある昆虫の最下の才である
遠き客の懷中では午の日ざしを愁い
窮しき人の腹の上では晨の雷を聴く

かたちは麦に似ているが、麴になりに行く
字は風を成していないから、梅を散らしもしない
しらみよ、爾に質問する。仙女をかめるのかねるのかね
神女の麻姑は首を搔きながら天台山に坐しているが。(同上)

湖に尻を吹かせて蟬の鳴	『七番日記』	(文化9年)
投出した足の先也雲の峰	『七番日記』	(文化10年)
ゆうぜんとして山を見る蛙哉	『七番日記』	(文化10年)
の、様に尻つんむけて鳴蛙	『七番日記』	(文化13年)

等が挙げられる。前述の飛躍句と重なる句もあるが、小動物などへの関心が高い一茶らしい修法とも考えられる。なお、童話の世界からも見受けられる。そのような場面の設定が面白くてユーモアがあると言えよう。孤独で一貫した彼の生涯の中にさり気なく友人のような温かきで話し合える小動物は一茶の内面の故郷であり、純粹さを失くさないための核心的な役割の主演とも言えよう。

金笠の場合も農家でよく見かける家畜と旅先で出逢う微物(虱・蚤等)を素材とした詩が見受けられる。例えば、

魚

遊泳得観底好時
錦漂斜日録楊垂
銀鱗如舞罵相和
玉躍旋潛鷺獨知
影礁横雲嫌罟陷
光況初月似釣疑
帰来森列変眸下
畫出心頭一幅奇¹⁴⁾

がある。柳のある池の中に魚が遊んでいるのがよくわかる。それはちよ

14) 黄昏の柳の下、錦のように綺麗な池の中で、泳ぐ魚は手でつかめそうなほど鮮明に見え、銀色に閃き翻れると、木の上の鶯は踊り、玉のような鱗が浮き沈みすると、鶯は跳ね回る。去って行く雲が映ると、網のことを気にする。鋭い形の月が映ると、釣針が来るかと気にする。このすべての風景が眼に染みる心に描く美しい一幅の絵 (同上)

うど夕暮れの頃で、清い池の中での魚が眸を光らしながらあまりにも平穏に遊泳しているので、鶯がこれに答えるように鳴く。池の中で遊泳している魚の生態をまるで、清水の中で遊んでいる子供のように感情移入をし、うまく表現している。ものに対する繊細な観察力が目立ち、読み手に新鮮なカタルシスを感じさせる。

一茶と同様に一生を旅で過し、孤独の生を終えた金笠においても世俗での世態諷刺は彼の社会意識から生じたものであるとすれば、自然の中から自由に遊泳している魚の生態(本能)を通じて彼は、心情の平穏さと慰労を受けたに違いない。

2.3. 同音・同字の反復

俳諧における反復法の第一人者は一茶と言っても過言ではないほど一茶句には反復法をうまく詠みこなしている句が多数ある。特に擬声語や擬態語の表現に多く見られる。同音による表現のリズミカルな音楽性によって生動感の表現が増している。例えば、

ざぶりざぶりざぶり雨ふるかれの哉	『享和句帖』	(享和3年)
がりがり竹かちりけりきりぎりす	『七番日記』	(文化8年)
下ゝも下ゝ下々の下国の涼しさよ	『七番日記』	(文化1年)
秋の蟬つくづく寒し寒しとな	『七番日記』	(文化1年)
瓜西瓜ねんねんころりころり哉	『七番日記』	(文化13年)
がらがらやびいやびいうりや梅の花	『七番日記』	(文化14年)
月ちらり鶯ちらり夜は明ぬ	『七番日記』	(文政1年)
どんど焼どんどゝ雪の降りにけり	『七番日記』	(文政1年)
たまれ霰たんまれ霰手にたまれ	『八番日記』	(文政4年)
夕あらねんねんころりねん 哉	『文政句帖』	(文政5年)
ひょいひょいひょいひょい達者じまん哉	『文政句帖』	(文政8年)

等、実に多いが、大概の句が一茶調成立期の句日記に収録されていることからしてこの反復法による詠みぶりは一茶の好んだ修法の一つであり句全体に音楽的な要素を加味することにより子供達にも覚えやすくした一茶

の配慮がうかがえる。特に、「たまれ霰たんまれ霰手にたまれ」の句は、霰と対話を交わすような描写とともに「たまれあられ」という同じ系列音(たま・あら:ア、れ:レ)の反復により聴覚的な清新さが浮き立つ。また同音の働きにより諷刺性を表した金笠の修法と互いに似ているといえよう。金笠も同音による反復法を以って詠んだ詩が何首かある。例えば、

竹詩

此竹彼竹化去竹
風打之竹浪打竹
飯飯粥粥生此竹
是是非非付彼竹
貧客接待家勢竹
市井売買歲月竹
万事不如吾心竹
然然然世過然竹¹⁵⁾

がある。此处で「竹」はハングルの発音からすると、「Tai-대」を読む。そこから「Tairo대로(助詞)-대로通りに、~のままに」という意味にして詩を詠んでいる。風の吹くままに水の流れるままに生涯を雲水の如く放浪した詩人の心境が巧く描かれている。ハングルと漢字の言語的な特徴を巧く捉えて詠んだ詩と言えよう。

九月山

昨年九月過九月
今年九月過九月

-
- 15) このままあのまま成りのまま
風吹くままに波打つままにしよう。
飯なら飯、粥なら粥、このまま生きよう。
正しいものは正しいと、正しくないものは正しくないでしょう。
客の接待は家毎に任せ、
市井の売買はその時の為替に任そう。
すべては自分の思い通りには行かないから。
何でもないこの世、このまま通りすぎて行こう。(同上)

年年九月過九月
九月山光長九月¹⁶⁾

上詩からは、九月山(山名)の「九月」と季節の「九月」を巧みに調和させ、面白く詠んでいる。こういう修法は俳諧(俳句)に現れる即興性とも通じるものであろう。旅先で、その時・その場で詠みあげた金笠の詩からは特にそのような趣きの詩が多い。

松松栢栢

松松栢栢岩廻
水水山山處處奇¹⁷⁾

上詩は金剛山の自然を見事に表現した名詩である。このような類の反復法をよく捉えた詩は諷刺詩からもうかがえる。たとえば、

吉州

吉州吉州不吉州
許可許可不許可
明川明川人不明
漁佃漁佃食無魚¹⁸⁾

がある。この詩は、朝鮮のハムギョン道の吉州の地名の訓をうまく捉えた詩である。本来、吉州という地方は昔から許氏が多いとされる。村名は吉

-
- 16) 昨年、九月に九月山を通り、
今年も九月に九月山を通る。
このように毎年、九月に九月山を通るので、
九月山はいつも九月の景色かな。(同上)
- 17) 松、松、栢、栢、岩、岩を廻って、
水、水、山、山、至るところ皆珍しい。(同上)
- 18) よい村、吉州というのに、少しもよい村(吉州)ではなく、
許氏が沢山住んでいるのに、過客を泊めてくれる家一軒なく、
明るい川、明川という所に、人は全く明るくなく、
漁佃という漁村に魚は1匹もない。(同上)

州でありながら人心が悪いので、吉の州ではないのだと言っている。姓氏は許氏であるが、放浪客に一晚の宿を許可してくれないのを諷刺して詠んだ詩である。諷刺に卓越な才能をもっている金笠においては反復法は更により方法であったかも知れない。勿論、反復による詩ではない場合にも秀詩は幾らでもあるが、反復によるほうが諷刺の効果が一層増していると考えられる。

両者とも、反復法による卓越な詩を残しているのを見てきた。句全体にリズム感を吹き入れて平易で覚え易い句に完成させており、金笠の場合、容易な語彙を反復・列挙していながらも巧みに詩の内面の核心を創り出す表現が光っている。諷刺性の加味とともに金笠の詩においても一茶同様のリズム感が溢れており詩全体に生命力を与えている両者の類似点が発見できよう。

3. 弱者の詩

一茶ほど弱者に人情豊かな温かさと慈愛の視線を注いだ者もそれほどいないであろう。無論、芭蕉の句においても見つけられないわけではないが、ただ一茶句においていくつも見受けられるのは、一茶自身が常に自己にたいしても「弱者」であると判断していたためであろう。また、その他にも彼の家庭的な不幸により脳裏に刻んでいた「被害意識」や幼い子供のような純粋な内面をもっていたからであろう。

幼少年期から祖母以外の人からは特別に可愛がれることのなかった一茶は15歳で家から離れる時期からすでに長男としての権利を奪われていたかも知れない。父の死後から絶え間なく遺産相続の交渉に縛り付いている姿にも投影されているように自分の物を取り戻そうとする強い意志が顕れる。他の理由もあったであろうが、例えば、力をもたない弱者が本当の自分のものにしか愛着できない心理的煩悩は当然一茶にもあったに違いない。それゆえ、常に孤独で、世相の苦しみに耐えながら旅先を転々として

いた一茶自身と弱きものとが同格であるとの考え方が心中にはすでに定着していただろう。

先ず「貧」に関しては、貧しき者への慈愛の視線を次の一茶句から検討してみる。

乞食の枕に並ぶうき葉哉	『七番日記』	(文化10年)
霜がれや路通乞食に笠かさん	『七番日記』	(文化10年)
乞食の角力にさへも最眞かな	『八番日記』	(文政4年)
寒声や乞食小屋の娘の子	『文政句帖』	(文政5年)
今の世や乞食むらの衣配	『文政句帖』	(文政6年)

上句の乞食のように一茶自身も遺産相続の終わるまでは乞食同様の生活をしたためか、まるで自己の日常をあらわしたような詠みぶりがうかがえる。

金笠にも百姓(農民)によせる心情は只ならぬものがあり、逸話つきの例詩を挙げると、

特価訴題

四両七錢之特
放於青山綠水
養於青山綠水
隣家飽太之牛
用其角於此特
如之何則可乎¹⁹⁾

とある。貧しい農民が儉約して貯蓄しておいた金額が4両7錢と言う。そ

19) 四両七錢の子牛を買い、
青山綠水に放し、
青山綠水で飼ったが、
豆で満腹になった隣りの牛が
角で子牛を殺してしまった。
これをどうすればよからうか。(同上)

のお金で小牛を買ってきて野原に放って飼っていた。だが、隣の富家の牛が角で死なせてしまった。失意に落ちた農夫(字の知らぬ者)をみた金笠は村長に、農夫の代わりに告訴状を書いた。その素晴らしい文章の告訴状をみて村長は、笑いながら富家の者に小牛の代金を払わせるように命令したとの逸話がついている。金笠はその場をそのまま過ぎ去ることもできたが、「貧富俱非吾所願 願為不富不貧人」という、富でもなく貧でもない全てを超越して生きて行きたい彼の中道思想がよくわかる文章である。そのような思想を持っている側からみると、強者の富者に負けそうな弱者(貧者)の不利益が合理的でないとの判断が立ったであろう。なお、出世したくても出世できない社会的な不合理性に順従せねばならない弱者としての金笠自身の心境もまた投影された逸話ではなかろうか。なお、旅先である農家で厚い接待に預かり、感謝の気持ちを表した詩が一首ある。下記すると、

艱貧

地上有仙仙見富
人間無罪有貧
莫道貧富別有種
貧者還富富還貧²⁰⁾

である。上詩の示すように、貧しい農夫(弱者)への同情心は自然に出てきたものとしか考えられない。また弱者として二人とも身体の不自由な障害者にも慈悲の視線で見つめた作品を残している。一茶の場合、

木がらしや地びたに暮るゝ辻諷ひ	『文化句帖』	(文化1年)
小盲や身を寒月になして行	『七番日記』	(文化7年)
小盲や右も左(り)もむら時雨	『七番日記』	(文政1年)
時雨ゝや親腕たゝく啞乞食	『八番日記』	(文政2年)

20) 誰が神仙の世界を天に求めるのか。
金持ちの世界が神仙の世界であり、
罪悪が他にあるのではなく、
貧乏の中から色々の罪悪が生じるのだ。(同上)

夜時雨やから呼されしあんま坊 自筆本

等、障害者を素材として詠んだ句が多数見受けられる。庶民達の「生」、または貧しく弱き者達の底辺の「生」まで慈悲の視線をもって見つめた一茶の姿が伝わる。彼も江戸に出て、定まらない居所を転々と乞食のような生活を続けていた。おそらく一茶の旅先で出会った光景の反映でもあろう。前にも指摘したようにこのような考え方は自然に生じたものでありこれ等の句も体験から出てきた自然物であると言えよう。

金笠にも一茶同様、弱者として佝僂を素材とし、詠んだ詩がある。挙げると、

佝僂

人皆平直爾何然
項在胸中膝在肩
回首不能着白日
側身僅可見青天

臥如心字無三點
立似弓形小一絃
慟哭千秋歸去路
也鷹棺槨用團圓²¹⁾

である。佝僂の出生から死亡までを悲痛な心境でよく吐露した詩と言える。現在は医学の進歩により幼い頃の病気(佝僂)は治療を万全に受ければ完治するが、当時は治療の不可能な難治病であった。子供の頃から神童と

21) 人間とは、みな真っ直ぐだが、あなたは何故、そんな有り様なのか？

襟首は胸中にあり、膝は肩にあるようで、
頭を回しても日が見えず、
身を動かし辛うじて天が見える。
臥すと心の字に三点のない形で、
立つと弓の字に弦が1本の無い姿。
慟哭するに、あなたが死んであの世に行くときは
棺槨も当然丸くせねばならん！(同上)

呼ばれていた金笠が、成人になって家柄の来歴のため出世不可能に成ってしまったその境遇と類似している。自意とは別に他意に従うしかできない現実への反感等が前詩からも読み取れる。やむを得ず現実に降伏せねばならない悲運の金笠の一生と同一の立場の佝僂者も一生を不治病で苦しみつつ、冷待されつつ生きる者に同一な眼で見ていたに違いない。他人(佝僂者)の境遇を巧く捉えて自己との関連から、受動的な生に対する哀切な共感がよく反映されていると考えられる。

一茶と同じように自身の境遇と似た弱者的な心理の者への同情や憐憫などが適切によく描かれている。

4. おわりに

以上、一茶と金笠の表現における比較検討、特に‘諧謔・弱者性’というキーワードに縮約される両者の作品の特徴を中心に考察してみた。

本考で指摘した特徴の以外にも両者に見える共通点が非常に多いことにまた驚かざるを得ない。両者の生存・活動時期が非常に類似していて、また当代の両国間あるいは東アジアにおける‘諧謔’の様相に共通する部分があったと考えられる。

本考でもふれたように東アジアにおいて18世紀-19世紀はまさに激動の時期でもある。特に政治的な不安定より起る為政者に対する怒りと諷刺が両者の作品の比較検討からもうかがうことができた。それは詩人としての良心的な発露であったと考えられる。そんな告発が詩的な言語遊戯(同音・同字)及び擬人法、弱者を擁護する描写(弱者詩)によりさらに明らかになった。特に、両者における主な共通点の中に‘庶民・微物(弱者)に対する慈愛と憐愍意識’を指摘することができよう。なお、この他にも自然風景を詠んだ卓越な作品が多数存在する。

それに、以前より日本でも韓国の金笠への関心は高かったようである。最近、金笠に対する日本内での研究動向を纏めた論文によると、第一に、

‘政治的な抗拒の象徴’として、第二に、‘言文詩’として、第三に、‘上品であり、理知的である’として理解していたと述べている²²⁾。

金笠に対しての関心が益々高調している中、両国の韻文への比較研究はより積極的に行われる必要があるのではないだろうか。

今後、両者の作品における十分な比較分析を通じ、その他、当代の東アジアにおける韻文の共通分母になる点はないのか、追究してみたい。

<参考文献>

- 李應洙編(2000) 『正本金笠諷刺詩全集』実践文学社
박상도(2010) 「일본내(日本内)의 김삿갓 문학에 대한 평가양상」『동양학 제47집』단국대학교 동양학연구소 p.111
今村与志夫(1976)「諷刺と抒情—金笠の詩の鑑賞と批評」『歴史と文学の諸相』勁草書房 pp.211-212
清水孝之・栗山理一編(1976) 『蕪村 一茶』角川書店 p.234正岡子規『正岡子規全集 第一巻』改造社(1931) p.400
矢羽勝幸外(1977) 『一茶全集 第一巻 発句』信濃毎日新聞社

접 수 일: 6월 30일
심사완료: 7월 28일
게재결정: 7월 31일

22) 박상도(2010) 일본내(日本内)의 김삿갓 문학에 대한 평가양상」『동양학 제47집』단국대학교 동양학연구소 p.111

<要旨>

小林一茶と金笠の比較検討への試み

一諧謔と弱者性を中心に

一茶・金笠、二人とも諷刺詩の大家であるが、時代的・社会的状況や両者の個人的状況等が巧く溶け合い絶妙な諷刺詩が出来上がったとも言える。また個人的事情は異なるが、社会の不合理性に対抗する意識は両者とも非常に類似している。一茶の諷刺は表の肯定的な表現が裏面の諷刺性をより際立たせていると言える。反面、金笠の場合、即興的で飾り気のない直説的な諷刺性は漢字音とハングル音の同音や反復の修法によって明確に表れていると言えよう。

小動物(微物)に対しても二人は一貫して特別な愛情と憐憫を示している。そのような温かさを以て向き合う小動物から一茶は故郷での思い出などを思い出したり、幼い頃の自分自身を発見したりした。また、同じく金笠の場合も農家でよく見かける家畜と旅先で出逢う微物(虱・蚤等)を素材とした詩を詠んでいる。また同音・同字の反復を重ねながらも少しも違和感なく宇宙の理致を鋭く表現した名詩になったのは金笠自身の優れた文筆力の結果であるとしか言いようがない。一茶に同音・同字による表面的な充実さとユーモアがあるとすれば、金笠の詩からは内面的な充実さと詩才による理知的なユーモアが伝わると言える。

つまり、本文でもふれているように、一茶の諷刺は表の肯定的な表現が裏面の諷刺性をより際立たせている。一方金笠の場合、即興的で飾り気のない直説的な諷刺性は漢字音とハングル音の同音や反復の修法によって明確に表れている。